

“ケア”の担い手の変遷について

—近世から近代にかけて—

○ 関西学院大学大学院人間福祉研究科 笹尾照美 (会員番号 009109)

キーワード：性別役割分業規範、近世、歴史社会学

1. 研究目的

現在のいわゆる「近代家族」の概念は、「男性は仕事、女性は家庭」の性別役割分業規範が前提とされている。社会福祉の場にもその影響がある。看護師、ホームヘルパー、介護福祉士などの多くが女性であり、そのために低賃金である。しかし「近代家族」は昔からあるのではなく、われわれが今日「家族」と呼んでいるような社会現象は、たかだか200年内外の根拠しかもっていない（落合 1898）。ジョン・W・スコットは「歴史学がどのように過去を表現するかが現在のジェンダーを作りあげる手助けをしている」（スコット 1992）と述べている。このように歴史は再構築されるものであるという認識にたち、「ケア」（介護と育児）の担い手の実態の変遷を明らかにして、性別役割分業規範で“ケア”役割が線引きされていなかった時代から徐々に女性の役割として固定化されていった状況を検証したい。女性の地位という点に着目すれば、高群は室町時代に古代家父長制が支配的となり、女性の地位が低下し男性の地位が優位になったとみている。その後さらに女性の地位は低下していき、近世において最も低下したとされる（高群 1996、井上 1967）。近世においては、女性の地位が低かったために、女性には任せられないという認識から、“ケア”の主導権は男性が握っていた。そのため現在とは異なった性別役割があった。

「近代家族」以前の“ケア”の担い手の実態、及び近代までの変遷について研究し、「近代家族」においては“ケア”の領域が女性の分担とされてきたが、そのことが決して普遍的なものではなく歴史的に変遷してきたことを検証することによって、固定的ではないことを示したい。

2. 研究の視点および方法

社会福祉分野では、先行研究として介護と育児の両方について近世から近代にかけての変遷に着目したものは見あたらなかった。歴史分野では介護と育児それぞれの研究はいくつかみられた。しかし両者を“ケア”労働として一つのカテゴリーで捉え、考察した先行研究をみつけることはできなかった。そこで本研究では介護と子育てを“ケア”労働として論証する。研究方法は主に、マックス・ウェーバーに代表される歴史社会学の手法を用いて行う。つまり、「介護」「育児」双方を検証するために一次資料にあたるのには限界があるために二次資料を主に使って検証を行う。そのために限界があることを予め断っておきたい。上野は主に二次資料を用いる歴史社会学の手法について、「歴史の篡奪者」という汚名をこうむるかもしれないが、歴史を再構築してメタ・ヒストリーを語る意義を強調し

ている（上野 1998）。本研究では、“ジェンダー”という特定の視点にもとづいた問題化により、従来、女性が行ってきたとされる“ケア”の担い手像の再構築を試みたい。

主な文献として、『近世の女性相続と介護』（柳谷 2007）、『江戸時代の孝行者－「孝義録」の世界』（菅野 1999）では近世の介護においては男性が主導権を握っていたことが述べられている。『子宝と子返し－近世農村の家族生活と子育て』（太田 2007）、『江戸の捨て子たち』（沢山 1998）では父親が教育していることや子どもに対する接し方が述べられている。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮については、日本社会福祉学会の「研究倫理指針」にもとづき配慮した。また、インタビュー対象者には個人が特定されないようにすることや調査データは調査研究以外の目的で使用することはないことを説明して同意を得た。

4. 研究結果

近世においては中世に比べてさらに女性の地位が低くなっていることが、相続からの女性の除外や、結婚・離婚における夫の優位性などから明らかになった（長野 1982）。近世における介護について主に性別役割について検証した。武士には「武士の介護休業制度」があり（山田 2005）、農民、商人も男性が主導権を握っており、実際に介護に携わっていることがあきらかになった。子育てについても主にその性別役割について検証した。武士、農民、商人がそれぞれの立場から、父親が子どもに背中をみせて子育てしていることがわかった。近世から近代までの“ケア”役割について、その性別役割に着目して検証した結果、近世初期は明らかに男性が“ケア”役割において主導権を握っていたが、近世後期に進むにしたがって“ケア”役割が男性から女性に移っていったことがわかった。

以上の結果から、介護の研究と子育ての研究とに分断されていた先行研究を“ケア”という一つの概念からあらためて検証することにより、性別役割は決して普遍的なものではなく、歴史的に変化してきており、今後も変化する可能性があることを明らかにした。

5. 考察

本研究では、近世から近代にかけて、“ケア”の性別役割は歴史的に変化してきており、今後もより良い方向に変化していく可能性があることを明らかにできたと考える。

近世において“ケア”役割は男性から女性へ移っていったと考える。“ケア”の担い手の性別役割の男女の逆転の理由として、軍役・夫役にあったのではないかと（脇田 1982）とか、女性が経済力を持っていったことも影響しているのではないかと（長野 1982）と考えられるが、その理由と時期についての検証は今後の課題である。

参考文献

井上 清（1967）『日本女性史』三一書房

スコット・ジョーン・W（1992）『ジェンダーと歴史学』荻野美穂訳 平凡社

高群逸枝（1996）『高群逸枝全集 4「女性の歴史(1)」』理論社

上野千鶴子（1998）『ナショナリズムとジェンダー』青土社